2025年6月1日　説教「群衆への給食」

ルカの福音書9章7～17節

9章の冒頭はイエスが弟子達を伝道へと派遣した記事を読みました。何も持たずに、信仰一本で行きなさいと、言われて出発。与えられた賜物も用いられて、弟子達は貴重な経験をしたことでした。

１．イエスのことを聞いたヘロデ（7～9）

①国主ヘロデは当惑し（7）**「さて、国主ヘロデは、このすべての出来事を聞いて、ひどく当惑していた。それは、ある人々が、『ヨハネが死人の中からよみがえったのだ』と言い、」**

国主とはローマ帝国の属国であるユダヤの王のことで、「領主」と訳されもします。ここにあるヘロデはヘロデ大王の息子でヘロデ・アンティパスです。このすべての出来事というのは、これまでの福音書記事にあるイエスのなしたことを示しています。彼が戸惑ったのは、巷でバプテスマのヨハネが生き返り、働いているのではと広まっていたからです。

②人々の感想（8）**「ほかの人々は、『エリヤが現れたのだ』と言い、さらに別の人々は、『昔の預言者のひとりがよみがえったのだ』と言っていたからである。」**

中には列王記にある預言者エリヤの再来だという人があり、また昔の預言者の誰かがよみがえったのだという人もありました。いずれにせよ、それほどイエスの存在は人々にインパクトを与えていたのです。

③ヨハネとイエス（9）**「ヘロデは言った。『ヨハネなら、私が首をはねたのだ。そうしたことがうわさされているこの人は、いったい誰なのだろう。』ヘロデはイエスに会ってみようとした。」**

そこで、ヘロデは言ったのです。「ヨハネなら、私が首をはねた」。これは事実です。ヘロデはその兄弟ピリポの妻ヘロデをめとったのです。しかし、ヨハネはそれを不法だとしました。そのことで、ヘロデはヨハネを入牢させ、ついには娘も絡ませて、ヨハネの首をはねさせたのです（マタイ14章）。しかし、ヨハネでないことは確かであったとしても、それでは噂の人物は一体誰なのかと思い、ヘロデはイエスと会うことにしました。

２．イエスと群衆（10～12）

①使徒たちの報告（10）**「さて、使徒たちは帰って来て、自分たちのして来たことを報告した。それからイエスは彼らを連れてベッサイダという町へひそかに退かれた。」**

さて、派遣された弟子達は、帰って来て宣教報告をしました。イエスは彼らを連れて、ベッサイダに退かれました。ベッサイダはガリラヤ湖の北端沿いの町でした。漁師の町という意味ですが、ペテロとアンデレ、ピリポはこの町の出身でした。一行が向かったのは町場からは離れた所でした。イエスは、静かに祈りの時を持つ目的があったものと思われます。

②ついてきた群衆（11）**「ところが、多くの群衆がこれを知って、ついて来た。それで、イエスは喜んで彼らを迎え、神の国のことを話し、ま**

た、いやしの必要な人たちをおいやしになった。」

しかし、意に反し多くの群衆がその移動を知って、ずっとついて来たのです。イエスは彼らを迎え入れました。その上で、彼らに神の国について話されました。マタイ 13 章などにある、種蒔きの話やパン種の話などをなさったのでしょうか。その上で、癒しのわざもなさったのでした。

③群衆の解散を要望した弟子達（12）**「そのうち、日も暮れ始めたので、十二人はみもとに来て、『この群衆を解散させてください。そして回りの村や部落にやって、宿をとらせ、何かを食べることができるようにさせてください。私たちは、こんな人里離れた所にいるのですから。』と言った。」**

やがて、日が暮れ始めました。弟子達は揃ってイエスの許に来て願いました。群衆を解散させて村や部落に行かせ宿を取らせてくださいというものでした。その理由は、これだけ大勢の人々であり、人里離れたこの場所では、食事もとれませんからというものです。弟子達なりの配慮でした。

３．五千人の給食（13～17 節）

①五つのパンと二匹の魚（13）**「しかしイエスは、彼らに言われた。『あなたがたで、何か食べる物を上げなさい。彼らは言った。『私たちには五つのパンと二匹の魚のほかは何もありません。私たちが出かけて行って、この民全体のために食物を買うのでしょうか。』」**

イエスが言われたのは意外なことでした。即ち、弟子達に何か食べる物を与えなさいということでした。しかし、弟子達からすれば、身近にあるのは五つのパンと二匹の魚だけでした。これだけでは、これだけ多くの人々を養うことなど到底できません。また、どこかに出かけて行って、食糧を調達し、彼らに食べさせることは不可能だと反問しました。

②男だけで五千人（14～15）**「それは、男だけでおよそ五千人もいたからである。しかしイエスは、弟子たちに言われた。『人々を、五十人ぐらいずつ組にしてすわらせなさい。弟子たちは、そのようにして、全部をすわらせた。」**

なにしろ、目の前にいるのは大人の男だけでも 5000 人もいるのです。困っている弟子達にイエスは、人々を 50 人ぐらいずつに組にして、坐らせるように命ぜられました。弟子たちは言われるままにしました。それ自体が大変な仕事だったでしょう。5000 人ですから。

③皆が満腹し（16～17）**「するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福して裂き、群衆に配るように弟子たちに与えられた。人々はみな、食べて満腹した。そして、余ったパン切れを取り集めると、十二かごあった。」**

イエスは 5 つのパンと二匹の魚を取って、天を見上げ、祝福して裂いてから、群衆に配るよう弟子達に命ぜられました。すると人々はそれを食し、満腹したのです。パンは余りが出て、それらを集めると 12 の籠一杯になりました。不思議な奇蹟が起きたのです。

《結論》 今朝もこの聖書箇所から三つのポイントで考えます。「

第一は、キリストのもてなしと憐みのお心についてです。

イエスはベッサイダの郊外に行かれたのは、祈るためであったと思われます。また、いささかの休息をもするためであったでしょう。ところが、人々が集まってくるのです。その時、主イエスは喜んで彼らを迎えてられました。そして、神の国を語り、いやしのわざをなさったのです。私たちが休もうとする時に、助けを求める人がいた時にどのように対応するでしょうか。静かに過ごそうと思っている時に、群衆がやってきたらどうするでしょう。なにかをしようとしている時に、それを阻むように人々がやってきて、いろいろと要望したらどうしますか。ついつい苛立ったり、冷たい対応になったりしないでしょうか。イエスは「群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てている彼らをかわいそうに思われた」（マタイ 9:36）とあるように、憐みの主でありました。キリストを見上げる私たちにも、優しい心が備えられますように。

第二に弟子達の経験についてです。

この記事の前に主イエスは、弟子達を地方に宣教派遣していました。ここでも、五千人の給食をするにあたって、まず「あなたがたで、何か食べる物を上げなさい」とチャレンジしています。宣教派遣の前に、「何も持たないで行け」と言われた主は、第二の難題を提供しているのです。それは無理だと伝えた弟子達でしたが、主は大いなる経験をさせます。それは、五つのパンと二匹の魚を用いて、5000 人の給食をさせるにあたって、その配布を弟子達にさせたのです。つまり、この大いなる奇蹟が進む過程の中に、弟子達を介入させたのです。何が起きたのかは、そこにいる者たちも、福音書の読者たちも十分にはわからないのですが、弟子達はその奇蹟のプロセスを体験させられたのです。それは、あの風と波を静められた時の体験とは、また違ったものでした。つまり、それは奉仕者として、奇蹟の過程に加わらせられたということです。私たちが教会の働きに加わるというのも、そのようなものです。主なる神の御業が成される時に、私たちを主は用いてくださるということです。主は私たちを救いの御業に関わらせていただけるということです。その厳粛なる出来事を祈りつつ受け止めていきたいものです。

第三に、霊肉を養ってくださる主についてです。

ここにいた群衆たちはお腹を空かせていました。弟子達は彼らなりに配慮して、彼を帰らせようとしたのです。しかし、イエスはその必要を給食というかたちで満たしてくださいました。私たちも実際に、胃の府の必要があります。一方霊的渇望もありましょう。これらの必要を主イエスは知ってくださっています。そして、それを満たしてくださいます。「わたしはいのちのパンです」（ヨハネ 6:48）と言われた主は、霊肉の必要を満たしてくださるのです。

私たち自身の内からは憐みの心も、伝道の心も生まれてきません。しかし、神の恵みによって癒され、霊肉の必要が満たされていく時に、そうした心も生まれてきます。主なる神の憐みによって生かしていただきたいのです。そしていささかでも主のお役にたちたいものです。